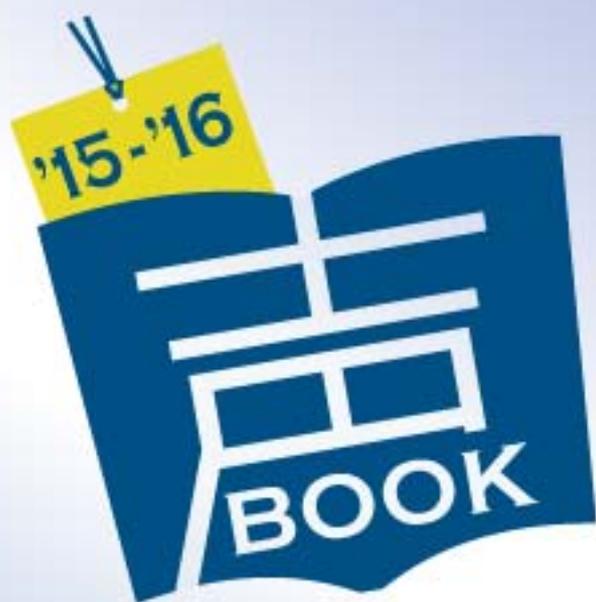


北

HOKUREI VOICE 2015-2016

嶺



学校法人 希望学園

北嶺中・高等学校



「企業のお医者さん」である コンサルタントとして お客さまのために

1

PROFILE

小林 駿

平成14年3月 札幌市立幌西小学校 卒業
平成20年3月 北嶺中・高等学校 卒業
平成20年4月 東京大学文科一類 入学
平成22年4月 東京大学経済学部 進学
平成24年3月 東京大学経済学部 卒業
平成24年4月 A.T. カーニー株式会社 入社



企業のお医者さん

私はいま、外資系のコンサルティング会社でコンサルタントとして働いています。聞きなれない仕事かと思いますが、ひとことで言うならば「企業のお医者さん」という表現が一番わかりやすいでしょうか。

例えば、お医者さんは、「体の調子が悪い」という患者さんに対し、「熱を測る、血液検査をする」などをして、原因は「インフルエンザウイルス」という診断をし、「タミフルという薬」を処方します。コンサルタントはこの〈患者さん〉が〈企業〉に置き換わったものです。例えば、「売上の調子が悪い」という飲料会社さんに対し、「お客さんにアンケートをとる、ライバル会社を調査する」などして、原因は「若者がライバル会社の飲料に流れてしまった」と診断し、「若者の感性をとらえた新製品」を出すことを提案する、というのがコンサルタントの仕事です。

この「お医者さん」の比喻を、私は気に入っていてよく使うのですが、それには理由があります。

小学生の頃、私は父親に憧れて医師を志していました。しかし、好きな科目が社会と英語だったため、文系・理系の選

択に際して、文系を選びました。自分としては納得して選んだ道でしたが、幼い頃からの夢であった医師への道を、自ら閉ざしてしまったことはずっと心の片隅に引っかかっていました。ですが、人生とは分からないもので、その文系という道の先で、「企業のお医者さん」であるコンサルタントという仕事と出会うことになった訳です。

夢を諦めずに想い続けることで、このように結実することがあるのだということを、身をもって体験しました。「お医者さん」の例えを使うのもそういった経緯からです。生徒のみなさんには、著名人やスポーツ選手が口にする「夢を大切に」という言葉通り、夢を持ち、それを忘れずにいてほしいと思います。

この仕事は、まさに人命を預かる医師と同様に、危急存亡のときにある会社がお客さまであることも多いので、やり甲斐のある仕事であると同時に、大きな責任が伴います。プレッシャーも大きいですが、課題解決に成功し、お客さまである会社の社長さんから感謝の言葉をかけられたときの喜びはひとしおであり、日々それをめざして仕事に励んでいます。

1・2年生の頃

勉強という意味では、「北嶺の授業をしっかり理解してついていけば大丈夫」という先輩の言葉を信じ、授業に集中して取り組み、指示される予復習をするのみ、というスタイルでした。ここでしっかり勉強を「習慣化」できたのはよかったと思っています。結局、このスタイルは卒業するまで変わらなかったのですが、そこからわかるように北嶺の確立された授業・カリキュラムに則って勉強できていれば、心配は要りません。

そのような勉強への安心感を背景に、部活で大好きなサッカーに打ち込むことができたのもよかったです。勉強だけに偏らず「自分の好きなこと」に打ち込む時間も大切にしていました。



3・4年生の頃

高校受験用の勉強が必要なく、大学受験を見据えた勉強をこの時期からできる、というのは中高一貫の北嶺の大きなメリットの一つだと思います。先生方も授業以外の添削などでいっそう熱心に勉強を見てくださるので、安心して先取りして勉強することができました。それ以外にも、部活動・学校祭などの行事に打ち込むなど、いわゆる「青春」を満喫できた時期でした。

4年生の終わりにある海外修学旅行も、今でも印象に残っている思い出です。二週間ほど異国の地で英語に触れながら生活できたことは、少なからず今の仕事にも繋がっているといます。



5・6年生頃

先輩の話や聞く機会などにも恵まれ、東大への憧れを持った私は、5年生の頃には明確に東大を意識して勉強を始めました。北嶺主催の東京の大学見学ツアーや先輩の講演会などの機会を通じて、早い段階で具体的に大学についてのイメージを抱けたことは大きかったように思います。

そんな私の受験プランは、5年生の間にセンター試験対策を完成させ、6年生になってから東大向けの勉強に集中する、というものでしたが、これも5年生までに通常の高校3年生の内容を終了する北嶺のカリキュラムだからこそ可能だったように思います。東大受験対策に十分な時間を持って取り組めたことで、現役合格を勝ち取ることができました。



「あの先生になら 命を預けられる」と言われる 医師をめざす

2

PROFILE

南元 勇紀

平成16年3月 札幌市立前田北小学校 卒業
平成22年3月 北嶺中・高等学校 卒業
平成22年4月 東京大学理科三類
(医学部医学科) 入学



医学部生の生活

現在私は、東京大学医学部附属病院にて、一人前の医師となるために、実習生として医師の方から現場での仕事を学んでいます。私はまだ医学部の6年生で医者ではないため、実際の大学生活について書かせていただきます。

まず、入学していきなり医学の勉強をするわけではありません。最初の2年間は他の学部の学生と一緒にのクラスで英語や数学といった高校の勉強の延長のようなものや、現代の教育の問題点について議論し合う授業など、様々なことを学びます。ここで知り合うクラスの友達はほとんどが医学部以外に進学するので、現在は外資系証券で活躍する友人の話なども聞くことができ、このつながりはとても貴重なものであったと感じています。

また、医学部の学生はこのクラスとは別に医学部生のみで構成される部活に入る事となります。自分は北嶺でラグビーをやっていた経験もあり、アメフト部に入部しました。合宿や練習はもちろん楽しかったのですが、何よりも医学部における先輩・後輩といった縦のつながりができるので、医学部でのこれからの生活の事や、ひいてはOBの方から卒業後の

医師としての進路のお話なども聞く事ができ、これもまた貴重なつながりでした。

3年生になると、解剖実習など、人間の体の基本について学びます。人間の生身の体をじっくり観察するのはもちろん初めてだったので、最初は抵抗がありながらも人体の構造をととても良く理解でき、後々に学ぶ疾患を理解する大きな手助けとなりました。4年生では、3年生で学んだ事を基に座学で各臓器の疾患について細かく学びます。この3・4年の期間はテストがとても多い期間ですが、計画的に学習することができれば、部活に打ち込んだり、旅行をしたり、自由に時間を使うことができる期間になっています。

5年生になるといよいよ病棟での実習が始まります。実際に病院で入院患者さんを持ち、問診を行ったり、手術の際は実際に助手として入ったりします。座学で学んでいた頃よりもリアリティーがあり、その疾患独特の苦悩などもわかって、学び多き毎日です。外科でのことですが、患者さんの「あの先生になら命を預けられる」という言葉がとても印象に残っています。医療というのは、疾患の病態を理解するのと同時に、日々のコミュニケーションがあってこそ、患者さんが安心して医療を受けられるという事をあらためて実感で

きました。私もこういった細かい事に気をつけ、日々の些細な変化も見逃さないような医師になりたいと思っています。

学生でいられるのも今年で終わり、来年からは研修医となります。現在は自分にあった特色を持つ研修病院を探すためにいろいろな病院へ見学に行っています。また、国家試験に

も合格しなくてはならないので、そちらの勉強も進めなくてはなりません。医者は一生涯勉強だと言われますが、そのベースとなる部分を今はしっかり築いていきたいと思っています。

MY HOKUREI LIFE

1・2年生の頃

入学したてのころは、知り合いがあまりいなく、男子校という特殊な環境だったので馴染めるか不安でした。しかし気の合う友人が少しずつ増え、休日に遊びに行ったりするうちにどんどん仲良くなっていきました。

部活はテニス部に入部しました。そこまできつい部活ではなかったので、適度に勉強と両立することができました。今でも帰省した時は、当時の部活の同期とテニスをして思い出話に花が咲きます。



3・4年生の頃

北嶺生活最高の思い出といえば、何と言っても2週間の海外修学旅行です。当時はカナダの語学学校に入り、他の国の生徒と一緒に英語の授業を受けます。授業内容は、最終日の発表会に向けて劇の練習をするという楽しいもので、いろいろな国の人と交流できたのは良い思い出です。

また、4年生の時には、東京の大学見学ツアーもありました。東大や早稲田などの大学構内を見学できるだけでなく、実際に当時の北嶺卒の東大生とお話できる場もあり、刺激的な体験でした。



5・6年生頃

5年生に入ると、だんだんと受験が近くなり、勉強を意識せざるを得なくなってきます。そこで勉強生活にシフトする良いきっかけとなったのが、仲間と参加した勉強合宿です。一緒に勉強をしたり、将来の夢を語り合うことで、学習へのモチベーションを高めることができました。

また、北嶺は受験生活のバックアップ制度が素晴らしく、先生方には気軽に進路相談にのっていただいたり、英語の和訳や英作文の添削をしていただいたり、至れり尽くせりでした。北嶺にいれば、受験期に困る事はないと思います。



3

PROFILE

橋床 亜伊瑠

6年生(高校3年生)
札幌市立平岡公園小学校出身





ディベートで学んだ 「自分で考えること」 将来は新エネルギーの 開発に携わりたい

英語・日本語で全国大会に出場 サマリースピーカーとして試合をまとめた

私は1年生でディベート部に入り、5年生では部長を務めました。部員は約20名おり、毎週4、5回、練習しています。だいたい紅白戦の練習試合ですが、あっという間に時間が過ぎてしまいます。私は日本語と英語、両方のディベートをしています。2014年は、日本語で北海道大会優勝。全国大会に進出しましたが、残念ながら予選で敗退しました。英語でも北海道大会で3位となり、全国大会に出場しました。

ディベートの試合では、相手の主張を全否定するのではなく、認めるところは認めながら、自分たちの主張の優越性を訴えます。また、一つの論題に対し、肯定、否定、どちらの立場からも主張できるようにしなければなりません。そのため、自分で多角的にもの考えることができるようになったと思います。また、相手に対する紳士的な態度も大切です。

英語のディベートの場合、表現や論理構成が日本語とは異なるのが刺激的で面白く、また視野も広がります。私は試合では、最後に主張するサマリースピーカーを務めていましたが、形勢が有利な時には試合をまとめ、反対に不利な時には流れをひっくり返すために新しい視点を持ち込むなど、ディベートの醍醐味を味わうことができました。

小学5年生で読んだ『不都合な真実』 物理学に興味があり、工学系を志望

私は小学5年生の時に、アメリカの元副大統領だったアル・ゴア氏が書いた『不都合な真実』という本を読んだことがきっかけで、環境問題に興味を持つようになりました。勉強では、他の科目以上に整然としている物理が好きです。「どの大学で何を」ということまで、将来のことを具体的に決めているわけではありませんが、工学系の勉強をしていきたいと思っています。そして、できることなら、地球にダメージの少ない新エネルギーの開発や研究に携わりたいと思っています。

北嶺の良いところは、やりたいことに打ち込めること。部活の顧問の先生の指導でも、そうした環境が整っています。だからディベートと同じで、仲間を肯定して、個性で競い合えます。これからも、自分で考えることを通じて個性を伸ばしていくとともに、相手を尊重する態度を貫いていけるように努力したいと思っています。

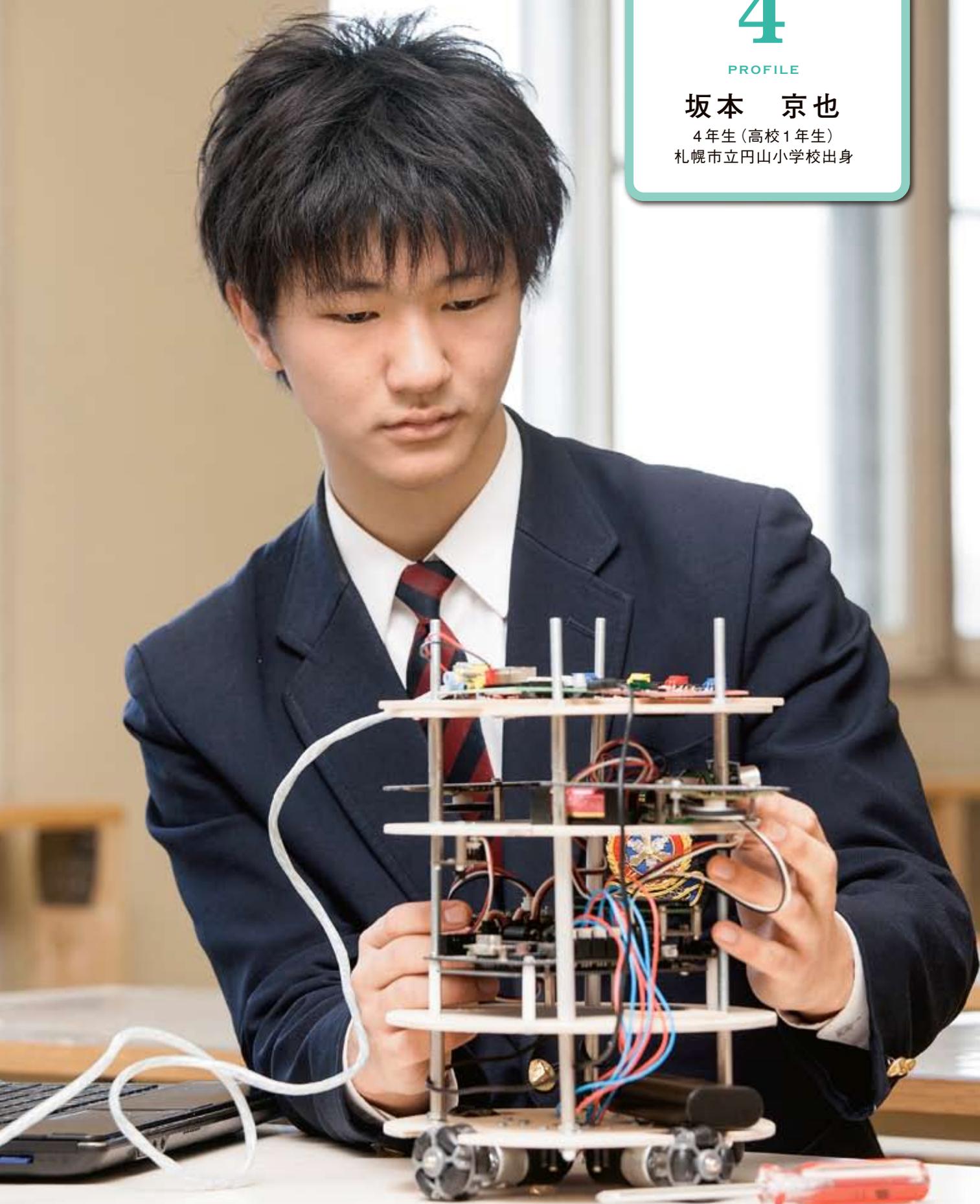


4

PROFILE

坂本 京也

4年生(高校1年生)
札幌市立円山小学校出身





「ロボカップジュニア世界大会 ダンス部門」で優勝 各国の選手と夜を徹して プログラミング

ロボット体験教室で面白さにはまる 友人たちとチームを組んで製作

私は小学5年生の時にロボット体験教室に参加し、ロボット教室に通うようになりました。北嶺に入学してからは別の中学の友人らとチームを作り、ロボット作りに励んでいます。私たちのチームは、2014年3月の「ロボカップジュニア日本大会」で3位となり、世界大会へ出場することができました。

開催地はブラジルのジョアンペソアという小さな町です。私たちは「ダンス部門」の「スーパーチーム部門」に参加。これは他国の選手とともに20人で1チームとなり、全部で20チームくらいが競技するものです。私たちはポルトガル、スロバキアの高校生と一つのチームになりました。

3体ずつロボットを持ち寄って、9体のロボットで一つのダンスをするために、丸1日かけて話し合い、お互いのロボットのプログラミングを修正したのですが、この話し合いが大変でした。どう動かすのがよいのか、いろいろとアイデアを出し合い、取り入れたり、除外したりの繰り返しです。英単語をつないで話をしたのですが、通じたのは北嶺の英語の授業のおかげだと感じています。

それぞれのホテルで翌朝までに プログラミングを完成させ、大会へ

8時間の話し合いを経て、各国の選手は自分のホテルに戻り、各自プログラミングをしました。私たち3人も夜を徹して準備しましたが、きっとポルトガル、スロバキアのチームメイトも寝ていなかったと思います。大会ではうまくいったと思いましたが、まさか優勝できるとは思っていませんでしたので、本当に驚きました。ポルトガル語で「俺たちはチャンピオン」と大声で繰り返し歌いました。こんな素晴らしい経験はもちろん初めてのことで、もし在学中にまた世界に行くチャンスがあれば、挑戦したいと思っています。

私はロボットそのものよりプログラミングが好きです。将来、できたら地震のシミュレーションをやりたいと思っています。もし巨大地震が起きたら、地形や都市はどういう影響を受けるのか、それを予測することができれば、社会に役立つと思います。

北嶺では素の自分をさらけ出し、それを認めてくれる仲間や先生がいることが、最大の魅力です。これからもみんなを信じて、いろいろなことにチャレンジしていきたいと思っています。



5

PROFILE

中野 雅仁

3年生(中学3年生)
札幌市立幌西小学校出身





宇宙は想像力を 刺激してくれる 好きな絵で 文部科学大臣賞に

スタジオジブリのアニメが大好き 4回目の挑戦で文部科学大臣賞を受賞

私は小学3年生の時から宇宙の生命探査やロケットに興味を持ち始め、将来、宇宙にかかわる機関や企業で仕事がしたいと思い、北嶺に入学しました。広大な宇宙という謎に満ちた世界に尽きない興味を感じるとともに、ロケットの工学的で精密な美しさにも惹かれます。絵を描くことも好きで、1週間に4、5日は描いています。この絵もそうですが、使うのは主に水性ペンです。

この絵は生命探査のために系外惑星に向かっているシーンを描きました。2年生の夏に、2週間ほどかけました。小さいのでわかりにくいかもしれませんが、恐竜のような生き物などさまざまな生命体を想像して、描きこんでいます。『天空の城ラピュタ』などで知られるスタジオジブリのアニメーション映画が好きで、その影響を大きく受けています。

この絵を〈「宇宙の日」記念行事全国小中学生作文絵画コンテスト〉に応募し、絵画の部中学生部門で文部科学大臣賞を受賞しました。結果を知らせていただいたときには、まさかと思いました。4回目のチャレンジだったので、とてもうれしかったです。細かいところまで気持ちを込めて描きこんだのがよかったと思っています。

何事にも集中力を持って取り組みたい テニス部で練習するのが楽しい

絵は好きですが、じつは美術部ではなく、テニス部です。仲間と一緒に体を動かすことも楽しいです。勉強では社会や理科、とくに天文に関するものが好きです。北嶺では教科書を超えたことも教えてくれるし、質問すれば素朴な疑問にも答えてくれるので、勉強が楽しく感じます。

また、校舎の周囲には雑木林があって、自然が豊かにあるのも、私にはとても素晴らしいことだと思います。時間があるときには、この周辺でクワガタやトカゲなど、いろいろな生物を観察しています。

絵はこれからも描き続けていこうと思っています。そのためには、限られた時間のなかで何事にも集中力を持って取り組むことが大切だと思います。北嶺では自分で自分を制限しなければ、やりたいことが追求できます。これからも宇宙のことをたくさん学び、表現していきたいと思っています。



生徒会活動

生徒会長から

6

齋藤 環汰

5年生（高校2年生）
江別市立東野幌小学校出身



生徒会？みなさんはどんなイメージを持っているのでしょうか。「生徒会って、普段、何をしているの？」「どうせ、生徒会室でしゃべっているだけでしょ？」これが生徒一般のイメージではないでしょうか。僕はそのように思うのも当然だと思っています。なぜなら、生徒会は表舞台に立ち、何かをするのではなく、北嶺の行事や生活を陰から支える組織だからです。自分たちが運営した行事が成功し、みんなの楽しそうな顔を目の当たりにしたときには、底知れない達成感を感じることができます。生徒会長として大変なこともあります。そのおかげですべてが報われます。

僕はサッカー部にも所属していて、両立することも可能です。ぜひ、みなさんも生徒会に入って、北嶺を陰から支える存在となってもらいたいと考えています。

STUDENTS

校技・柔道

柔道を 経験して

7

宇波 武尊

3年生（中学3年生）
札幌市立緑丘小学校出身



もし、北嶺でやりたいことが見つからなければ、僕は柔道をやることを強く勧めます。

特に、柔道部に入るのがおすすめです。僕は中学から柔道を始めましたが、たちまちのめり込んでしまいました。まず、自分の技が決まると、きれいに相手を投げることができたときは、ものすごく気持ちがいいです。この快感は柔道をやっている人にしかわかりません。次に、試合で勝ったときはもちろんうれしいですが、負けたときもそれが悔しくて、もっと練習をがんばろうという気になります。このスパイラルにはまって、僕は柔道をやめることができなくなりました。

柔道部は活動日が週3回と、他の運動部（例えばラグビー部やテニス部）に比べて少ないです。練習時間が少ないというのはデメリットにはなりますが、その分、集中して練習できるというメリットにもなると思います。柔道は北嶺での生活をさらに豊かにしてくれるでしょう。

校技・ラグビー

ラグビーを 経験して

8

加藤 武輝

2年生（中学2年生）
函館市立日吉が丘小学校出身



北嶺の校技の一つであるラグビーは、みんな協力をし、時にはタックルをしかけ、点を取り合うスポーツです。僕は北嶺に入学する前から、地域のラグビースクールに通っていましたが、北嶺のラグビー部は、それとは比べものになりませんでした。個人の技量はもちろんですが、一人ひとりが自分の役割を自覚し、チームのために自分を犠牲にして戦う先輩の姿に感動し、中・高共にラグビーをしようと思いました。

初め怖いと思っていた先輩方も優しくおもしろいので、気軽に話しかけられ、その中で、的確なアドバイスをもらうこともあります。練習で学んだことが実際の試合でできたときや、トライを決めたときなどには、何ものにも代え難いものがあります。この感動をみなさんにも感じとってほしいと思います。

V O I C E

青雲寮コース

未来の寮の 後輩たちへ

9

梅津 栄門

5年生（高校2年生）
青森市立堤小学校出身



みなさんは寮に対してどのような印象をお持ちでしょうか。僕は全国のいろいろな寮を調べたり話を聞いたりしましたが、その中で青雲寮は他と大きく違うなと気付いたことが二つあります。

一つ目は、みんなの勉強に対する意欲が高いことです。特に青雲寮コースは東大や国公立の医学部・医学科などの難関校をめざす人たちのためにつくられたコースなので、本当に意欲が高いです。友達同士が切磋琢磨して真剣に勉強しています。さらに、寮では勉強をサポートしてくださる寮の先生やチューターの卒業生たちも学校の先生と同様、もしくはそれ以上の指導をしてくださいます。

二つ目は、寮が楽しく住みやすい環境だということです。まず、先輩・後輩の関係がしっかりしています。後輩が先輩に対して失礼な態度をとることもなければ、先輩が後輩に手を上げるなんてこともありません。後輩は先輩を尊敬し、先輩は後輩に優しくするという関係ができあがっています。また、寮内での企画が豊富で月に一度は寮でイベントがあり、みんな楽しんでます。

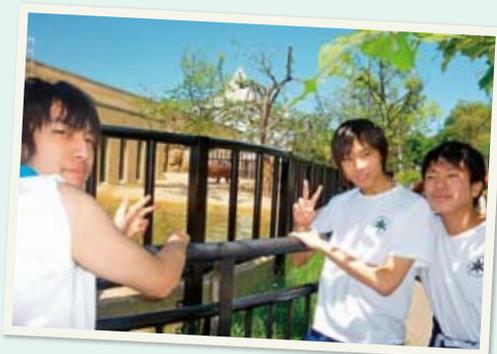
北嶺に入学される方は、ぜひ、青雲寮に入ってください。きっと、輝かしい未来を手に入れることができるでしょう！

全校登山

めざすなら 「支え合って」高い嶺

10 葛城 鵬三郎

6年生（高校3年生）
札幌市立緑丘小学校出身



父親の趣味がアウトドアだったので、以前からよく山登りに行っていました。トムラウシ・利尻岳・知床縦走など、北海道全域にわたって様々な山を登ってきました。しかし、今回登った北海道最高峰・旭岳の頂上には、まだ一度も立ったことがありませんでした。

登山当日、天気がよく気温も涼しくて、まさに登山日和となりました。自分には登山経験のアドバンテージがあり、また、体力にも自信があったので、全校登山ではサポートにまわることが多かったです。目標は班員全員で登頂すること。自分たちにできることは声をかけ合うことぐらいしかないかもしれません。でも、そのかけ声が他と共に一番の力となります。登り始めて5時間弱、班員全員で頂上の土を踏むことができました。体力に自信のない人も、必ず、誰かが支えてくれます。疲れたときこそ、声をかけ合ってみてください。めざすなら「支え合って」高い嶺です。

STUDENTS

海外修学旅行

最高の 修学旅行

11 萩原 大揮

6年生（高校3年生）
札幌市立伏見小学校出身



海外修学旅行。それは仲間たちと共に異文化の中で多くの体験ができる最高の行事です。

カナダでの語学研修で素敵なお姉さんに英語を習ったり、初めてのホームステイをしたり、NBAの迫力あるプレーを見たり、エンパイアステートビルの屋上から「ヒャッハー」と叫んで美しい夜景を眺めたりと、今までしたことのない体験ができました。

これは個人的な体験ですが、ニューヨークの地下鉄でトイレを探したときのことで。いくら探してもないので戻ろうとしたら、入った場所が広すぎてわからなくなってしまいました。15分くらいかけて適当な場所に出たら、行動範囲外に出ていて、慌てて戻ろうとしても、ビルが多すぎてどれが集合のビルかわからず、やっとの思いで着いたときには、とてもほっとしたのを覚えています。

みなさんも、修学旅行では迷子にならないようにしましょう。

部活動（新聞局）

国語力全般を 養う新聞制作

12 村田 倫生

4年生（高校1年生）
札幌市立二十四軒小学校出身



新聞局、それは新聞制作というプロセスの中で、さまざまな力を養える場だと思います。

新聞制作は、まず取材から始まります。これにより、聞き取る力やコミュニケーション能力を伸ばせると思います。特に後者の方は社会人にも求められる力だと思いますので、今から伸ばしておいても損はないはずです。そして、記事打ち。これは、文章構成力や表現力など、国語力全般を養うことができる作業で、これらの作業を重ねることで、良いトレーニングになっていると思います。こうした力はそう遠くない未来に待つ大学入試でも必ず武器になると信じて、今日も新聞を作ります。

V O I C E

部活動（陸上部）

後輩として、 そして先輩として

13 榎本 克朗

6年生（高校3年生）
美幌町立美幌小学校出身



僕たち陸上部が練習するとき、必ず通る坂道があります。標高差およそ40メートル、全長600メートルの長い坂道です。この坂を駆け上がる時、僕たちは時として先輩後輩関係なく、競い合いながら駆け上ります。また、一団となって協力し合いながら駆け上ったり、自分のペースで駆け上ったり、先輩の背中にぴったりくっついて風除けにしてみたりもします。そして、こっそりと後輩の風除けになって走ってあげたりもします。

もちろん上下関係は大切ですし、これ無しでは部活動は成立しません。ですが、それだけでは良好な関係は築けません。後輩は自分より長く生きている人間を敬い、先輩は後輩に気を配りながら責任を果たさなくてははいけないと思います。大変なことです。先輩たちはそれをやってのけているのです。先輩だった後輩だった時期があります。後輩だった僕たちにもきつとできると思います。



いざ「北嶺」へ

その一歩から、未来は無限大にひろがり始める。